

優秀賞（学生部門） 鶴田悠佳

笑顔があふれる透析室

私は臨床実習りんしんじょうごくがくせしを経験し、患者さんと臨床工学技士りんしんじょうごくがくせしの関わりが「患者と医療従事者」というだけではないと感じました。

臨床実習の最初は透析業務とうせきぎょうむから始まりました。私は、週三四時間の透析業務が臨床工学技士にとっても患者さんにとっても流れ作業のようになっていっているのではないかと思っています。しかしふたを開けてみると、患者さんは笑顔で「おはよう」と挨拶をして透析を受けに來ていたり、透析の開始、終了時には会話を楽しんだりしており、臨床工学技士も笑顔で患者さんを待っていたり、自ら患者さんに話しかけたりしていました。透析室がただ治療をする、治療を受ける場所ではなく、患者さんと臨床工学技士の両方に「笑顔」があふれる場所になっていました。



なぜこのように雰囲気が良いのか疑問を持ちましたが、実習を進めていくうちに二つ理由があると思いました。

一つ目は、コミュニケーションのとり方です。「おはよう」「お疲れ様」などの日々の挨拶のときも透析開始・終了時の会話のときも必ず相手の目を見たり、患者さん一人ひとりに合った接し方をしたりすることで安心して治療を受けられるようにしていました。このようなコミュニケーションの積み重ねが患者さんとの信頼関係につながっていくのだと思いました。

二つ目は、業務に「慣れ」がないことです。実習指導者の方から「長い間関わっているからもちろん名前も顔も覚えていいる。それでもミスをする恐れもあるから必ず名前を聞くようにしている」と聞いたことが印象に残っています。機器が自動でも絶対はないと患者データや治療条件が合っているかなどの確認を怠らず、チェックを何重にもしていました。このような確認が安全な治療につながっていくのだと思いました。

治療に直接関わることも関わらないことにも、患者さんのために精一杯サポートする姿勢がとても大切であり、その積み重ねが「笑顔」があふれる透析室を作り上げたのだと実感しました。

